

結成
30周年

「住民の繁栄なくして、自治体労働者の幸せはない」をつらぬく

大阪自治労連第32回定期大会



大阪自治労連は大阪市内で9月13日～14日に第32回定期大会を開催しました。今年の1月14日に結成30周年を迎え、大会1日目の13日の夜には記念レセプションも開催しました。

大会では、安倍改憲NO!のたたかい、統一地方選挙、ダブル選挙、参議院選挙など政治革新と民主主義をめざすたたかい、会計年度任用職員制度導入に対するたたかい、組合員拡大のとりくみ、地域住民との共同のとりくみなど、各単組・補助組織・部会からこの一年の運動の経験が積極的に発言されました。そして、それらの到達を踏まえ、2020年度のたたかう方針を採択しました。

大阪自治労連は結成当初から、「住民の繁栄なくして、自治体労働者の幸せはない」というスローガンを掲げ運動してきました。30周年を迎える今年、改めて、その民主的自治体労働者論を学び職場にいかし、要求実現と仲間を増やす決意を新たにしました。(関連記事2～4面)



富田林市職員労働組合 関連協議会 第25回定期総会



富田林市での介助員歴、5年から30年のみなさん

富田林市職労関連協議会 支援学級介助員労働組合

(左から) 溝端真弓さん、山下政代さん、古賀良恵さん、西村郁子さん、野上弘子さん

子どもたちの権利を保障する 介助員には専門性が必要

富田林市内の幼稚園10園、小学校16校、中学校8校の支援が必要な児童・生徒の学校・園生活のサポートをしている介助員。取材当日は関連協議会の定期総会が行われ、その日に2人が組合に加入!!3人から5人に増えた支援学級介助員労働組合のみなさんにお話を聞きました。

知識・技術・経験・連携が 必要な仕事

介助員は市内に80数人が配置されています。中には医療行為が必要な児童・生徒もいるため、「特別介助員」として看護師もいます。研修などでは、「介助員は『黒子』として陰で子どもたちを支える働き」と言われていますが、その子自身が得意なこと・苦手なこと、集団生活の中でできること・できないことなどを見極めながら、その子を持っている力を引き出す知識や経験が必要です。障害の症例などの知識やそれに対する技術など専門性

が求められ、集団生活を支えるために先生方や介助員同士の連携も必要です。子どもたちの権利を保障する仕事と考えています。

子どもたちのがんばる姿に やりがいを感じて

子どもたちは、ハンディから感情のコントロールが難しくかったり、思いをうまく表現できなかったりで、それを受けてとめるのに苦労しますが、先生に怒られてしょんぼりしている気持ちに寄り添ったり、パニックになって動けない時に一言かけると気持ち切り替わったり、「自分でやるから」と、がんばっている姿を見るとやりがいを感じます。

「しゃべり場」で交流 仲間を増やして 働きやすい職場へ

点在職場で、それぞれが不安や悩みを胸に仕事をしています。組合としてつながりをつくり、働き方を少しでも良くするために、年2回の「しゃべり場」を続けてきました。毎回10人程度の集まりですが、病気休暇がない、休憩時間も取りにくい職場がある、研修を受ける機会がないなど、働くうえで困ったことを持ち寄り交流しています。その成果もあり、今日2人が加入してくれました。今後、みんなが安心して働ける環境整備やしっかりした研修制度などを要求し、会計年度任用職員制度の導入でも、改善を求めて労使協議をすすめていきたいです。